

證空上人（以下、證空、人師の敬称は略す）の教学は法然の念仏往生義を継承しつつ、行門・觀門・弘願の特殊名目を駆使し、衆生を阿弥陀仏の願力・念仏によって救済するシステムの基本とした證空独自の本願念仏義を説くことが西山教学の特色であろう。

また同時に證空は論理的教学を展開する一方で、当麻曼荼羅の流布に尽力したことは周知の事実である。ただ善導の『觀無量寿経疏』（以下、『觀経疏』）の内容が忠実に描かれたものである当麻曼荼羅を流布させた理由が、単に人々に伝えなければならないという義務感だけであったとは考えられない。当麻曼荼羅によって自らの教義の正当性を主張し、また図像によってその教義を理解せしめ流通せしめるという意図があったと思われる。美術作品による教化活動は、イメージとして民衆に印象付けられ、より効果的であったと考えられる。当麻曼荼羅等のいわゆる「絵解き」が良い例であり、その他の浄土教美術でも「絵解き」による大衆教化がなされるのである。

その一例として二河白道図がある。二河白道図は善導の『觀経疏』の散善義三心積の後に二河白道譬喩が説かれ、それを図像化したものである。二河白道図には様々なバリエーションがあり、『觀経疏』に説かれないものも表現される。それは単に他の絵画からの流用というだけでなく、教学的問題を含んだ制作意図が反映されていると考えられる。

二河白道図で證空思想の影響が認められるとされるのは香雪美術館本二河白道図（以下、「香雪本」）である。「香雪本」については諸氏によって考察がなされ、一部の図像に関しては證空上人の影響について論じられているが、全体を通して各図像に対して西山教学からのアプローチはなされておらず、未だ不明な部分も存在している。発表者はこのような不明な部分も西山教学による解釈が可能と考える。

例えば「香雪本」の娑婆世界の表現で四苦と韋提希婦人が描かれるのは、従来『觀経疏』に典拠を求め論じられてきたが、證空の『觀経序分義自筆鈔』卷三に「今、四苦ノ上ニ、殊ニ愛別ノ苦ヲ加ヘテ五苦トスル事ハ、今ノ経ノ發起、韋提夫人愛別ノ苦ニ依リテ来ル。故ニ、我五苦所逼ノ凡夫見ル事ヲ得ツ」に一致すると考えられる。この他「火宅」「群賊悪獸」「二河の表現とその象徴」「釈迦如来」「白道と行者」「阿弥陀仏」等の場面で同様に解釈することが可能である。

従来、本画の図像解釈には善導の解釈が多く援用されてきたが、他方、図像学的に「香雪本」成立に関与したとされる證空およびその門流に注意が払われてこなかった。しかしながら、このように「香雪本」が全体を通して、西山教学が反映されていることを提示することで、「香雪本」が西山門流の思想的背景を受けて制作された可能性を指摘したい。

キーワード：二河白道、證空、浄土教美術